



TITLE:

# <大會抄録>明清時代の養濟院と普濟堂

AUTHOR(S):

夫馬, 進

---

CITATION:

夫馬, 進. <大會抄録>明清時代の養濟院と普濟堂. 東洋史研究 1984, 43(3): 568-569

ISSUE DATE:

1984-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153957>

RIGHT:

## 大會抄録

### 戰國時代楚文化の中の鼎と敦

—— 周邊文化との關連を主眼にみる ——

閒瀬 收 芳

中國の戰國時代、長江中流域を中心に大きな勢力を築いた楚は、文化的にも、他の六國とは異なる様相をもつて發展した。本報告はこの楚文化の一指標として鼎と敦をとりあげ、主にその形態を通して、他の六國並びに長江下流、嶺南地方等との文化的關連を探ることによって、戰國楚の文化、社會の特質を考察してみようとするものである。

戰國楚墓からは、小型墓に至るまで、普遍的に鼎と敦が出土することから、戰國楚の興隆を支えたのが士人階層の充實であったことが推測される。又、この容器の形態についてみると、中原その他北方諸國の鼎の足が矮足化するのに對して、楚鼎の足は逆に細く長いものとなる。又、楚の敦は球形敦であり、三晉、秦にはみられないものである。こうしたことから、中原に對する楚の文化的な對抗、自立の姿が窺える。その對抗、自立を支えた力の一つとして、いわゆる百越族の文化を考えてみたい。即ち、楚鼎の足が中原鼎の矮足化に抗して逆に細長くなった理由を越鼎の影響とみたいのである。更にはその背後にある鼎に對する南北の意識の相違といったもの

のも探ってみた。

鼎と敦は副葬禮器のごく一部に過ぎないが、形態の變化、地域的相違が明白な容器であるので、その考察によつて戰國期の楚社會の特質がいくらかは明らかにできるのではないかと考える。

### 明清時代における養濟院と普濟堂

夫馬 進

明清時代には、恒常的な救済のための施設として、宗族内あるいは狭い範圍内でのものをのぞけば、養濟院を典型とする官營のものと、善堂とよばれる民間經營のものがあつた。兩者は經營主體の相違にとどまらず、「福祉」の理念から、資金の調達、經營の實態、さらに會計報告の方法にいたるまで著しい對照を示した。

報告者はすでに、民國の時代にまで續く善堂、これを支える善會がはじまつたのは、明末清初のことであるとの見解を示したことがある。善堂は續々と設置されてゆき、江蘇省などでは救済の實績のうえで、はるかに養濟院を凌駕するにいたる。ところが一方、はじめ民間經營として、善堂として出發したものが、官營化つまり「養濟院化」するケースもかなりあつた。普濟堂がその一典型である。ではいったい何故、民間經營のものが官營化し、自發的行爲「善舉」がのちに徭役と化するのだろうか。

今回の報告では、この善堂の官營化、善舉の徭役化に焦點をあてる。養濟院の歴史と經營實態をおうことによつて、「養濟院化」の

意味するものを考え、蘇州普濟堂等の實際の變遷をおうことによつて「善舉」の徭役化がいかなる結果をもたらすのか考え、前近代中國の國家と「福祉」あるいは公共事業とのかわりについて考えてみたい。

### 唐代京兆府の戸口動態

——敦博地誌殘卷を手掛りとして——

愛宕 元

近年、その具體的内容が明らかにされた敦煌所出の天寶初年書寫と目せられる「地誌殘卷」は、隴右・關内・河東・淮南・嶺南五道の一三八府州、六一四縣が記され、各縣ごとに管下の郷數が擧げられている。百戸を一里、五里(五百戸)を一郷とする唐代郷里制は、後半期における逃亡戸の激増などで九世紀になると大幅に戸數を縮少して再編される。京兆府に關しては、『長安志』、『太平寰宇記』等に唐代の畿内各縣郷數を記すが、いずれも縮少再編後のものである。それに對して、この「地誌殘卷」に記す郷數は、その書寫時期が天寶初年であることから、唐代戸口統計上のピーク時のものと見なすことができる。京兆府管下二十三縣の郷數について、この「地誌殘卷」所掲郷數と『長安志』・『太平寰宇記』所載のそれとを比較してみると、全國一般的な減少傾向が明らかに認められるとともに、例外的に郷數が増加している二、三の縣が存在する。その因として、特定縣への帝陵の集中とその護持のためのすぐれて政治的配

慮に基づく郷の移管という事實、また行在所として特異な發展を示す縣城都市の存在などが考えられる。このことは、京兆府管下縣の特殊な立地を反映する一方で、縣城ないし州城が都市として繁榮した場合の郊區鄉村域へのある種の波及効果とでも言うべき現象と見なすことができる。

また一縣だけは、郷數の異常に高い減少率を示すことが知れる。この地域の渠水について詳しく検討してみると、多數の碾磑による不法取水、上流地區の不法な渠水先取、さらには取水口たる斗門を獨占的に利用する大土地所有の形成など、農田水利上の大きな不利益が郷數減、すなわち戸口減の一因として浮び上ってくる。唐代後半期における京兆府管下縣の郷數増減から、この時期の鄉村社會の一端を考えてみたい。

### 秦檜權力の構成と限界

寺 地 邊

宋金和議關係の確立した紹興十二年から二十五年冬(秦檜の死)までの十四年間は秦檜專制期として規定できる。秦檜はこの間、諸政治勢力との連合・融和を拒否し、獨裁權力の道をひたすら歩んだ。秦檜專制權力とは最終的には次の四本の支柱より構成されていた。①在京官僚群においては臺諫および侍從——六部尚書・侍郎層、②皇帝周邊層——皇后・宦官・侍醫、③行在・江南諸都市の特